

マーケット・バロメーターとしての村上春樹

——反小説経済の限界を越えて——

池 田 信 寛*

小説を始めとする芸術作品が、鑑賞の場所と時間のみに限定されて消費されるという意味での単なる娯楽作品としてではなく、鑑賞者の生活の様々な側面や局面に、共感や示唆などの何かしらの影響を直接的間接的に広く与えるものとして存在するのであれば、作品やその作者が意図するものを探し当てる作業は、暗黙に語られている内容に明確な説明を与えるという意味の限りにおいて、重要性を帯びている。

I. 芸術作品分析への科学的接近

1. 芸術作品分析の問題点（その1）

芸術作品の分析における困難な課題の一つに、作品の解釈は鑑賞者の主観に委ねられるとする立場から見れば、作品研究は科学的分析の範疇から外れるという問題がある。科学的分析の有効性が、その論理性と実証性に存するとするのであれば、主観記述に陥る危険性がある芸術作品の分析に科学性を与えるという問題は、それが論理性と実証性を有する学問領域内において行う可能性を確保できるかどうかという問題となる。

実証性という問題に関しては、作品の作者や読者への会見を通じ言質をとる事により解決できるように思われる。だが、作者に明確な制作意図があったとして、その意図を越えた要素を結果的に含有するものが芸術作品であるとすれば、作品の意図を一元的に作者の意図に帰することはできない。全ての意図を明確な言語によって表現できないからこそ、作者は芸術という表現手段を採るのであり、表現不可能な部分を作者に問う作業は、行為矛盾となる。また、作者において何らかの明確な意図が存在したとしても、その意図を芸術表現という形にする限りは、作品が鑑賞

* 広島経済大学経済学部助教授

者の手に委ねられた瞬間、その解釈は作者の意図を越えて存在するため、作者の言質を以て、作品の意図を断じるのは作品が内包する意図を見損なう危険がある。さらに、鑑賞者の解釈をすべからず得られたとしても、言語表現においては非専門家である鑑賞者が、その解釈を明確な言語様式によって表現できるかについても疑問である。

もちろん、このような理由によって、作者や鑑賞者への会見から言質をとる作業の有効性が完全に無くなる訳ではなく、また、作者によっては、作品の芸術的な意図と意味について明瞭な説明を行う場合もあることも否定できない。それでもなお、作品が持つ社会的な意味についての説明に論理性や実証性を帯びさせようとするのであれば、作者や鑑賞者の発言を科学的な背景の内に語らせるような状況を必要とする。即ち、作者や鑑賞者に会見する側に、一定の専門領域からの接近が行われるのであれば、作者や鑑賞者の言質には、本人が意図せざるとも、結果的に、科学的な内容を帯びさせることが可能となる。

2. 芸術作品分析の問題点（その2）

本稿の目的は、最終的には、芸術作品が持つ経済社会的な性質を明らかにすることにあるが、その出発点として、日本国内外において相当の読者が存在し、作品の与える種々の影響が無視できない日本人作家、村上春樹を取り上げ、彼が心理学者である河合隼雄と行った対談『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』（岩波書店、1996年）の内容分析を通じ、彼の創作意図およびその作品が意図する経済社会的な内容を明らかにする。

この資料は、村上春樹が、自身の作品や執筆活動について語ったものであるが、会見相手が心理学者であることから、村上春樹作品において盛り込まれる日本人の心理的問題が指摘されるものとなっている。そのため、通常ならば読者の主観に委ねられる村上春樹作品の解釈を、心理学の視点から行うことが可能となり、その経済社会的な意味を導き出す手掛かりを与えている。

しかしながら、このような資料を分析の俎上に乗せる事に対しても、幾つかの批判が予想される。

その一つは、本資料は二次資料であり、そのことが資料としての信憑性に疑問を投げ掛けられるものである。確かに、著者への面会や手紙などが実質的には実現困難であるために、二次資料を使用せざるを得ないという経緯はあるものの、資料の内容には編集という手が加えられていない旨が告げられていることから、本資料には一次資料と同等の信憑性が得られていると考えられる。更に、一次資料のみが、科学

的分析に有効であるとするのであれば、例えば、歴史研究は成立しない事になり、科学的分析の対象となる範囲を極めて狭めることになる。問題は、資料から論理性と実証性を有する命題を得られるかどうかという、資料の分析方法の有効性にあるのであり、資料そのものにあるのではない。

もう一つの批判は、心理学を専門としない者が、心理学からの有効な分析を加えることが可能かというものがある。しかしながら、この資料は、一般の読者向けに出版されたものであり、使用されている心理学用語や心理学的内容も、一般教養の水準を越えるものではない。従って、一般教養的な心理学の理解の内、この資料を読み解くことは可能である。

Ⅱ. 反小説経済とマーケット・バロメーター

1-1. 芸術作品の社会的意味

芸術作品が、売買などの経済社会的行為を通じて、鑑賞者の何かしらの欲求を満たすものであれば、それは個人的な営為の範囲を越えた存在である。

芸術作品が、結果的に社会的な存在になる理由は、河合隼雄の認識に立てば、芸術家は、人間である限りは抱えている様々な病んだ部分を芸術表現に変換する力を持つと同時に、その芸術家の生きる時代や文化の病を引き受ける力を持つために、「深く病んでいる人は世界の病いを病んでいる」⁽²⁾ 結果として、「その人の表現が普遍性を持ってくる」⁽³⁾ 存在であるためである。

この認識を受けて、村上春樹は、人間の病んでいる部分を欠落部分と読み替えた上で、「人間というものはもちろん、多かれ少なかれ、生まれつき欠落部分を抱えているもので、それを埋めるためにそれぞれいろいろな努力をする」⁽⁴⁾ 結果、「その行為に結果的な客観性がある場合には、それは芸術になることもある。」⁽⁵⁾ とする。

1-2. マーケット・バロメーター

ここで、“WANTS” という語句には、「欠乏」という意味と同時に、「欲求」という意味があることを鑑み、また、人間の欲求が完全に満たされた状態を安定的な状態とすれば、人間は、常に不安定な状態に晒されているという意味で「病的」であり、その不安定な状態の解消を目指すために、欲求の充足を目指す存在であると言える。この意味において、芸術家とそうでない人間とを分離する明確な線は無く、むしろ、芸術家は、自身が生きる時代や社会の欲求あるいは病的部分や欠落部分を、芸術という形式で表現する存在として、人間社会の一方の端を形成するもの⁽⁶⁾

と考えられる。

この解釈と両者の認識を基本に据えれば、芸術家やその作品は、日常生活に潜む様々な欲求の敏感な感知器であると同時に、現実の側面や局面を象徴的に拡大して抽出するため、人々の欲求を広く現実化する刺激であると言える⁽⁷⁾。

ロロ・メイは、精神療法や精神分析が必要な人々について記述しているが、欲求という形に変換可能な社会の欠落部分や病的部分を描き出す芸術家も、これらの人々と同様、社会的標本としては、その有用性は期待できないが、その社会に来るべき問題の在り処を示す敏感な感应器、即ち、バロメーターとしては極めて有用な存在となりうる。その意味で、芸術活動は経済社会における「マーケット・バロメーター」と呼ぶことができる。

2-1. 欲求実現と現実

村上春樹における小説の執筆行為は、自己の中で安定的な状態を見出していない欲求に対して、小説という形式の中で言葉を与えるものであり⁽⁹⁾、その結果、村上春樹の欲求は、小説という形あるいは局面での充足を得る。小説の中で一旦充足ないし充足の方向性を得た欲求は、さらに、現実において、充足されることも期待される⁽¹¹⁾。小説の中での充足は、現実⁽¹²⁾に先んじるものであり、村上春樹においては、その欲求が現実での充足の場を得ることで、初めて小説執筆活動の最終目的が果たされることとなる。

村上春樹において、小説が現実⁽¹²⁾に先んじる関係が生じるのは、彼が、自己の執筆活動を、自己治療およびゲームセンターのロール・プレイング・ゲーム (Roll Playing Game) に類するものと説明している点に明らかである⁽¹³⁾。彼がプログラムと呼ぶものは、言わば、現実との関係に欠落感ないし違和感を持つ自己に、最終的には現実での充足を与える指針となるような象徴的内容を小説上に出現させる暗黙の心理的秩序である。ゲームをする者にとり、ゲームの内容が予め秩序立てられているという意味で、その暗黙の心理的秩序はプログラムであり、また、その心理的秩序が、まずは小説上で、そして、最終的には現実において見出されて初めて、この作家は心理的に安定的な状態を得られるという意味で、執筆活動は自己治療である。小説から現実へという流れは、暗黙の心理的秩序に形を与えて明確なものにする流れである。

2-2. 欲求実現と物語

心理的に不安定な状態から安定的な状態へと移行する流れには、自我による自己

理解という問題が絡んでいる。通常、自我においては、自己を含めた様々な事象は、論理的な法則や規則の内に理解されており、それから外れるものは、例外的なものとして、意識上では処理される⁽¹⁴⁾。しかしながら、変化に対して常に開かれているという意味で、自己は常に不安定な状態に晒されているため、自我による理解の水準を越えた段階に至ると、自我による自己の再理解の必要が生じてくる。ここに自己同一性の危機が生じるのであるが、新たに生じた自己が内包する秩序を理解するには、まず、その自己をそのままに認識する必要に迫られる。ここでは、それまでの自我による認識は機能せず、同時に、新しい自我はまだ形成されていない状態である。このような状態では、それまでの自我では例外として処理されていた様々な事象をも認識の対象とする。「物語というのはいろいろな意味で結ぶ力を持っているんです⁽¹⁵⁾」と河合隼雄が話す時、小説を含めた物語が、自己の持つ暗黙の心理的秩序を、自我の介入を経ずに、そのまま取り出そうとする試みであり表現であることを意味している。このように相反する事象をも、親和性の可能性があるものとして、認識の対象として処理するという意味で、小説は、自我の再発見までの過程に供するものである。

3. 反小説経済の問題点

村上春樹におけるこのような執筆活動は、結果的に、「その対応性の遅さと、情報量の少なさと、手工業的しんどさ（あるいはつたない個人的営為⁽¹⁶⁾）」に、社会的活動の意味を見出すことになる。これは、現代の経済社会が持つ一般的な傾向である「できるだけ、早い対応、多い情報の獲得、大量生産⁽¹⁷⁾」とは、相反するものとして位置づけられる。

経済社会における後者の代表的な例として、POS（販売時点管理）システムを挙げることができる。このシステムに代表される情報管理システムは、商品や決済に関する大量な情報の統計的処理から市場の変化を迅速に読み取り、それを商品開発や商品計画などに反映させるものであり、「マーケット・レーダー⁽¹⁸⁾」を構成するシステムの一部である。ロロ・メイは、先の「バロメーター」との対比において「レーダー」を論じ、社会の動きに反応して動きはするものの、自己の欲求に基づいて選択できないものと特徴付けており、それは個人の気質水準について語られているものの、論理的内容は法人水準にも当てはまるものである。

村上春樹の執筆活動が、市場における消費者の欲求に、商品によって、その充足の解決を見出そうとする企業や消費者の活動と類比の関係にあると見なせば、大量の情報による迅速な欲求の充足を第一義とみなす社会は、一見、消費者の欲求充足

に貢献しているようではあるものの、変化する自己が抱える欲求の在り処を時間をかけて探り当てる小説的な行為とは相対する方向に向かうものであり、その意味で、情報に基づき個人を最終的な標的とする市場細分化戦略のような「個人をもっとも大切と考える生き方が、個人をもっとも深く傷つける傾向を生み出している⁽²⁰⁾」との批判を内包するようになる。

そのため、常に変化する欲求の言語化、即ち、商品化という視点から見た場合、情報依存型の商品開発や商品計画や、そのような企業活動により提示された商品範囲内での購買および消費行動は、小説的な欲求充足行動からは掛け離れたものとなる。

暗黙の心理的秩序に明確な形を与える作業というものは、村上春樹の言葉を借りれば、「計画的につくるというのは、ぼくにとってなんの意味もない⁽²¹⁾」ため「いつも意識をニュートラルに集中し⁽²²⁾」「スポンテニアスに次何が来る、次何が来る、とつくっていった、最後に結末が来る⁽²³⁾」ものでなければならないのである。

このような小説的態度を、商品開発や商品計画、さらに、購買行動や消費行動の中に実現させようとするのであれば、欲求と商品の関係を自己と自我の関係に類比させて考察する限り、欲求ないし自己の言語化の在り方を小説の形成過程の中に探る必要が出てくる。

Ⅲ. 言語化と自己の再定義

1-1. 個の認識と言語化

言語の役割の一つは、様々な事柄の間を区別することにある。全体が個に分割できる、あるいは、個の集合が全体を形成するとの前提に立つ社会では、個の認識が可能であり、それは即ち、全体を構成する個々の言語化が可能となる⁽²⁴⁾。一方、反対の立場に立てば、個と全体は未分化であるため、個の認識は困難であり、従って、全体を構成する個々の言語化も困難になる。

言語の役割が「個」と「個」を区別することにあるならば、それらを区別する時点で既に、最低限、2つ以上の「個」を認識する行為が存在し、「個」の「客体化」が行われる。個と全体が未分化である場合は、この「区別」する行為自体が行われず、「個」の「客体化」も行われない。

村上春樹における主要な問題である“commitment”および“detachment”という行為は、「自己とその集団との間にある様々な距離を決定し、自己の相対的な社会的位置を割り出す行為」であり、そのため、「自己同一性の発見や自己定義を得

るための自己客体化行為である」と定義できるが、この定義を「個」の認識に援用すれば、言語化とは、個の自己同一性の発見ないし自己定義の形成である。

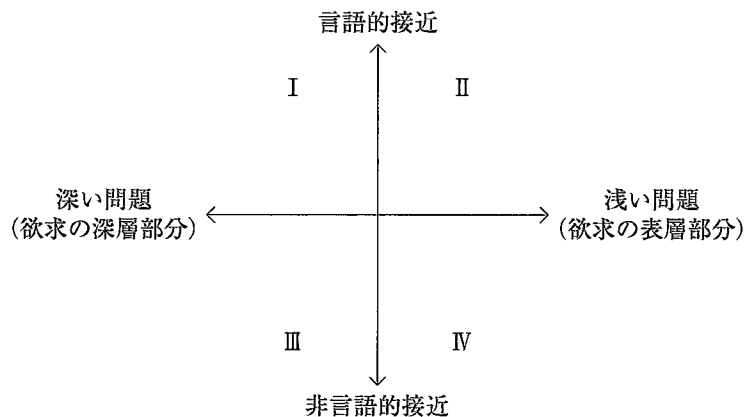
1-2. 問題への言語的ないし非言語的接近

「個」の認識が行われる状況では、言語化も可能であるため、言語による分析や対処が可能になるが、裏返せば、「個」の認識が困難な状況では、言語以外の手段による接近が必要となる。

例えば、ある問題への対処の仕方が、米国では、ある問題を個人の問題あるいは個人としての関わり方を出発点として受け止めるのに対し、日本では、個人の問題としてではなく全体で分かち合って受け止めるために、問題として意識できる状態での「症状を形成」しない⁽²⁵⁾違いとして生じてくる。

そのため、言語化が有効に作用しない状況では、例えば、箱庭療法や物語などが、問題の「非言語的認識」や「非言語的治療」に貢献する。正確には、心理療法に関する河合隼雄の考えを援用すると、問題が比較的浅い部分にある場合、言語的分析は有効であるが、そうでない場合は非言語的接近が有効であり、「問題の種類によってやり方を変えなければならない」⁽²⁷⁾。

例えば、POSデータが言語的範疇に分類されるものとすれば、商品開発においてPOSデータが強い影響力を持つ状況にあっても、「非言語的接近」を要する領域がある可能性が示唆できる。既発売商品とは、既に言語化された商品、即ち、曖昧模糊とした消費者欲求を充足させるために具体的な形態を与えられた商品であり、欲求の広がりにおいて、その商品が占める位置、即ち、「自己定義」の援用解釈としての「商品定義」が既に決定されているものと考えるならば、POSデータ



図表 1

は、商品定義の定まった既存の商品の販売動向を示すものであり、未発売の商品の販売動向や新商品開発においては、その利用に疑問が投げかけられる。

同様な問題として、日本における新聞などでの人生相談では、論理的な回答よりも、相手への共感を訴える「人情的」な回答が好まれるとされるが⁽²⁸⁾、これは2つの観点から理解することができる。

一つは、「個」と「個」を区別し、その相互の位置関係を割り出していく、言わば、論理的な作業は、「個」と「全体」が未分化な状態とは対極に位置する状態での行為であるため、「個」と「全体」を未分化のままに置く立場からは敬遠される。

もう一つは、相談の内容が、「深い問題」に属するものであれば、論理的な回答は言語的接近法であるため、問題解決には似合わない。「わからないからそう簡単ことが言えるんだ⁽²⁹⁾」という非難は、言語的接近では解決できない領域が問題に含まれている可能性を指摘するものである（図表1のⅢ）。

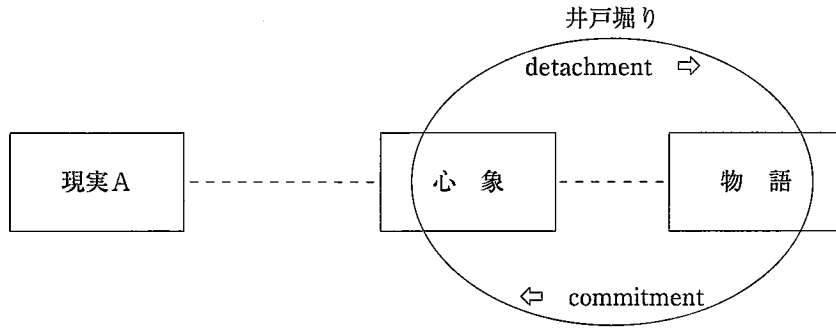
人生相談の問題は、問題が人生相談に限らず、接近しようとする問題の深さと、その問題を扱う個の在り方によって、問題への接近方法を変えるべきであるという主張に繋がっていくが、ここで留意すべき点は、問題への「より」言語的接近が適する「状態や状況」と、問題への「より」非言語的接近が適する「状態や状況」とが連続的に繋がっていると理解するのが現実的であるということである。これは、日本対米国という単純化された図式による理解によって陥る問題を回避するためである。

2-1. 執筆活動における「井戸堀り」

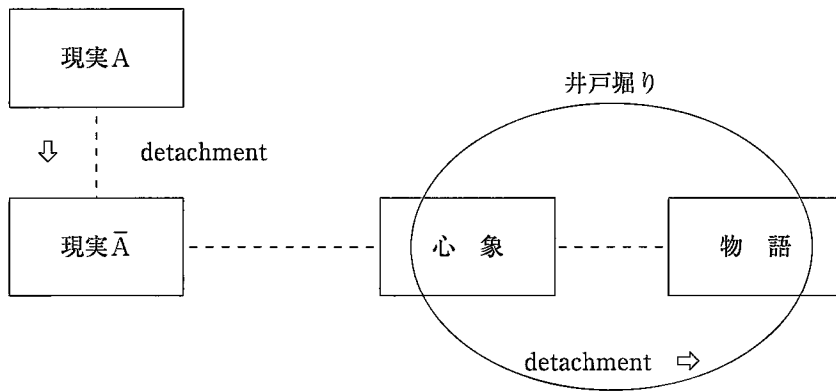
村上春樹は、その小説『ねじまき鳥クロニクル』の中で、主人公に幾度も井戸に潜らせているが、これは、単に井戸に潜るという物理的身体的行為を表したのではなく、主人公が、何かの内的秩序の発見や納得に到達するための、心理的な過程に作用する重要な行為を象徴させたものである。

この行為は、村上春樹と河合隼雄の両者によって、「井戸堀り」と呼ばれ、現実で直面した様々な問題を解決する際に、人間が採りうる特定の行為の例えとして使用される。その現実的な内容の一つは、まず、村上春樹自身の小説執筆活動の過程において生じており、それは、河合隼雄が指摘しているように、物語と心象との密接な「係わり合い」を見出すものである。さらに、その行為の背景には、現実という裏付けが前提となっているため⁽³¹⁾、例えば、ノンフィクション執筆のために事実調査を行い、現実を自分の中に取り込むという作業も必要となる⁽³²⁾（図表2-1）。

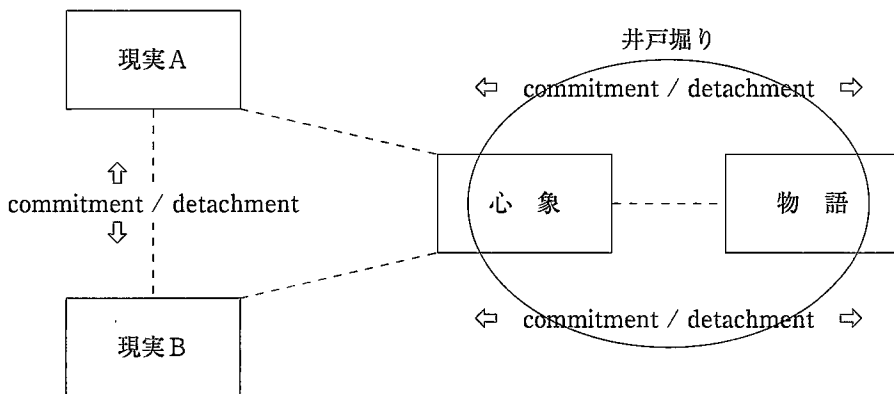
このような「井戸堀り」の基本図式は、村上春樹の小説執筆における3つの段階



図表 2-1



図表 2-2



図表 2-3

を考慮することで、その実際的な展開が把握できる。3つの段階とは、日本の文壇と伝統的な小説の文体から離れ、アフォリズム (aphorism「警句・格言」) やデタッチメント (detachment「離脱」) と称される内容の執筆を行う第一段階、日本の

文壇を体制とし、その補集合（あるいは裏返し）という意味での反体制的な態度から生まれた心象に統一性を与えて物語を形成する第二段階⁽³⁴⁾、このような日本以外の国で日本語を使用した小説を書くことの限界から日本への「係わり合い」を再び求めだした第三段階⁽³⁵⁾である。

第一段階から第二段階に掛けては、村上春樹が心理的物理的にも日本から離れ、特に米国において執筆活動および翻訳作業を行っていた時期と重なっているが、ここで形成される心象は、既に述べたように、体制の補集合としての反体制的な態度から生じたものであり（図表2-2）、より厳密な意味での自己定義に立った執筆活動は、次の段階を待たねばならない。村上春樹が、米国を日本的思考の補集合として捉えるのではなく、日本語による思考体系とは完全な補完関係にはない土壌を持つ国であるという認識を経て初めて、村上春樹の心象は、両国の現実の間において、唯一無比の自己同一性ないし自己定義を与えられ（図表2-3）、村上春樹独自の小説ないし物語形成という循環は、一定の終結を見る。

2-2. 「井戸堀り」における自己と自我の関係

「井戸堀り」の仕組みを、より汎用性のある内容を持ったものとして理解するには、夫婦関係に関する村上春樹と河合隼雄の議論を吟味する必要がある。

夫婦関係において、一方が他方を理解できなくなる状況について、両者は触れているが⁽³⁶⁾、そのような状況は、自己と自我という関係で見た場合⁽³⁷⁾、幾つかの場合に分類できる。

自我の認識対象となる自己は、常に変化に対して開かれている。そのため、自己は、矛盾する様々な側面を常に生じさせているが、通常、自我は、その統一的な認識から外れる自己の側面（静態的部分）や局面（動態的部分）を「例外」として、認識の対象外に置いている。自我の見直しを求められるのは、その例外的な自己の存在が無視できないほどに増大した際に生じる。増大の原因は、経験の蓄積など、時間経過による自己の変化がある一方で、自己そのものは変わらないものの、それを認識する自我が、その統一的な認識から外れる自己の側面の大きさに気付いた際にも生じる（どちらの場合も、結果的には、図表3のaからa'へ⁽³⁸⁾）。

村上春樹の小説執筆活動における3つの局面は、図表3に基づけば、「ある日突然『そうだ、小説を書こう』』と思った時から（aからa'へ）、自分の文体を模索する中で、アフォリズムやデタッチメントとしての文体を発見する（ α から α' へ）までの流れと、その新しい自我を出発点として、今度は米国の中での違和感を感じ（再びaからa'へ）、更に自分独自の文体を確立する（再び α から α' へ）までの

図表3 自己の変化と自我の変容

自我 \ 自己	a	a'
α		\Rightarrow
α'		\Downarrow

図表4 自我の見直しを要する自己の類型

自我 \ 自己	a	a'
b	1.	2.
b'	3.	4.

流れの中に見ることができる。

このような前提に立った場合、自我による夫婦関係の見直しは、1. 自分も相手も変化しない場合は生じないが、2. 自分の自己が変化した場合に生じるか、3. 相手の自己が変化した場合に生じるか、4. 自分と相手の両者の自己が変化した場合に生じる（番号は、図表4内の番号と対応している）。

「井戸堀り」の必要性は、1. 以外の状況の全てにおいて生じてくるが、そこで自我の認識対象となるものが「自己という現実（ないしは、行為と思考の集合）」であると捉えれば、「井戸堀り」とは、2つの異なる現実の間に自己の心理的社会的な位置を再び見出す行為、即ち、「自己の再定義」に至るまでの過程で行われる作業である。そこでは、自我 α や β が、相手と相手との関係、および、その関係の中での自分に関して持つ既存の定義を一旦放棄し、新しく生じた自己 a' や b' が、それまでの a や b とどう異なるのかを探っていく。この探究は、新しい自我 α' と β' が、相手、および、相手との関係、そして、その関係の中での自己について統一的な理解、即ち、「再定義された自己」を見出して初めて、終結する⁽³⁹⁾。この最終的な「再定義された自己」を見出すまでの過程が「井戸堀り」である。

2-3. 「井戸堀り」の定義

「井戸堀り」とは、特に（特に、と断ったのは、自我の発達に伴う最初の自己定義の形成過程においても「井戸堀り」は存在するためである）、現実との違和感を感じた自我が、自己を再定義（または、自我を再構築）するまでの過程（図表5の□□）と、そこで行う作業の方法論を指す。そこでは、自己に関する統一的な認識（あるいは自己同一性や自己定義）を放棄すると同時に、それまでの自我からは矛盾を多く含む自己を、後述するように、一旦、「保留」という姿勢で肯定しながら、自己を新たに統一する認識（あるいは自己同一性や自己定義）の体系を探っていくことになる。

図表5 「井戸堀り」を要する自我と自己の関係

B \ A				
	α / a	α' / a	α / a'	α' / a'
β / b				
β' / b				
β / b'				
β' / b'				

$\alpha \cdot \beta$: 自我 (あるいは自己の理解様式)

$\alpha' \cdot \beta'$: 新しい自我 (あるいは自己についての新しい理解様式)

$a \cdot b$: 自己 (あるいは自我による既存の意識対象)

$a' \cdot b'$: 新しい自己 (あるいは自我による既存の意識対象外の存在)

■ : 「井戸堀り」を要する範囲

2-4. 「井戸堀り」の特質

【「井戸堀り」と癒し】

自己という内的環境と他者という外的環境の双方が、常に開かれた状態では、自我は、自己同一性の再発見や自己の再定義を行う必要性に、常時、迫られる。そのような状況では、自己同一性や自己定義が一旦無効になっており、自我と自己は心理的に不安定な状態に置かれる。そのような自我は、「井戸堀り」を経て、再び、自己同一性や自己定義を獲得し、心理的に安定した状態へと移行する。それが、自我と自己とが「癒される」状態である。

夫婦には「一種の相互治療的な意味がある」とする理由の一部分は、例えば、村上春樹の言う「欠落」⁽⁴¹⁾であれ、自己の構成要素の一つである欠落部分の位置と大きさが、夫婦両者による「相互マッピングの作業」⁽⁴²⁾の中で特定され、自己同一性や自己定義の明確化に貢献するからである。

村上春樹が、「自分が語る物語というフェイズと他人が語る物語というフェイズとを、クロスさせてみたかった」と語るの⁽⁴³⁾は、図表2-3に見られるような、異なる現実の比較の中で「井戸堀り」を行い、そこから再び自己の位置を明確にすることで、自我と自己の安定、即ち、癒しを得ることを期待するからである。

【「井戸堀り」の放棄】

「井戸堀り」には、次に述べる「保留」という態度が必要とされるが、その状態

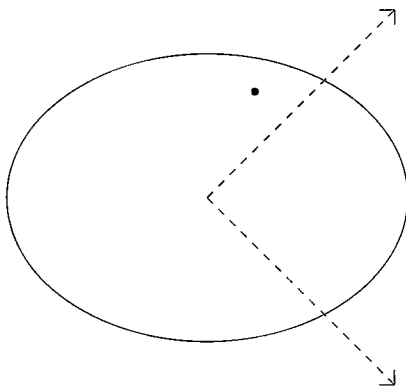
では、人は、過去の自己同一性や自己定義には頼れず、また、新しい自己同一性や自己定義は未だ形成されない状態に置かれるため、心理的には不安定な状態を強いられる。そのため、多くの場合、「井戸堀り」の放棄という結果になり、夫婦関係では、その一方ないし両方が「井戸堀り」を放棄した時点で、相手への非難、婚外性交渉、異性以外への事象への熱中、家庭内離婚、離婚、などの形として現れてくる⁽⁴⁴⁾。なお、昔の夫婦は、理解ではなく協力をお互いに求めていたため、「井戸堀り」は必要とされなかったのは、夫婦関係における各々の社会的役割が明確に固定されていたため、自己同一性や自己定義を見直す必要性も機会も無かったためである。

【「井戸堀り」における「保留」の功罪】

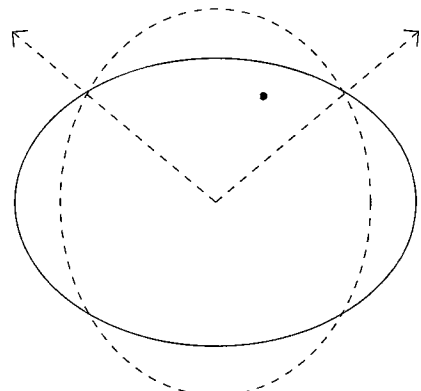
河合隼雄が、夫婦関係について、「日本の場合は、よい言い方をすると、確かめないまま、それこそさっきも話に出たずい哲学で、なんとなく同調しているのです⁽⁴⁵⁾」と指摘しているような関係においては、夫婦は、夫婦関係に関して、「井戸堀り」はするものの、言語による自我の形成を行わず、あるいは、非言語的な接近により自己を保つ。このような態度は、言語による統一性のある理解を「保留」するものである。

自己は自我に対して、常に矛盾した側面を持つものである、あるいは、自我とは、自己の持つ様々な秩序ないしは矛盾のうち、論理的に統一した部分を取り出し、これを認識するものである、という前提に立てば、自我から外れた部分にも基いた言動を取ることは、矛盾した言動を是認するという意味で、「ずるさ⁽⁴⁷⁾」として捉えられる。

この「ずるさ」には、自己の矛盾した部分を見捨てる「明白な偽善」と、その部



図表 6-1



図表 6-1

分を意識しない「アンビギュアスな偽善」の2種類が存在あるとするが、前者の姿勢は、自我の論理を明白に説明できるという一方で、その論理から外れる部分は無視するという側面を持ち合わせているため、自我の論理を自他ともに理解しやすい利点を持つが、無視された論理には主張の場がないという意味で「ずるさ」という否定的な部分を持つ。これに対し、後者の姿勢は、矛盾を抱えるがそれを明確にしないため、自我の論理を自他に説明しなければならない状況（例えば、言語化が可能な領域（図1のⅡ）や言語化の必要性が逼迫している事態など）では力を持ちえず、そのような場合は「ずるさ」として非難の対象となる。

しかしながら、自己に新しい側面や局面が見えている時、既存の自我の論理に当てはまらないとして、これを切り捨てることは（図表6-1の2つの矢印で挟まれた範囲と・）、新しい秩序とその論理（図表6-2の2つの矢印で挟まれた範囲と・）を発見する機会を失うことになる。これを回避するために、新しい秩序の側面や局面を切り捨てることもせず、また、説明もしない状態が「保留」であり、これは、既存の自我から新し自我への移行をもたらす過程として必要な態度となる。

ただし、この「保留」の過程で、非言語的接近が行われた場合であっても、個人における箱庭療法などの有効性と異なり、最終的には、自他に新しい自我の論理を説明しなければなくなる。あるいは、自他ともに、非言語的接近による、問題の箱庭療法的な解決を見ることが可能か検討せざるを得ない。いずれの場合であっても、自己に対して言語的接近を行う立場と非言語的接近を行う立場が対峙した場合、非言語的接近を行う立場は、そうでない立場に対して、少なくとも非言語的接近や「保留」という姿勢の有効性を言語的に説明しなければならない。

IV. 結 論

小説家の創作活動から市場の動きを探ろうとする試みは、単なる両者の類比関係を理由に生まれるものではなく、創作活動への刺激を与える源泉が経済社会にあることと、その結果として生み出される作品が経済社会の中長期的な動きを投影していることから生じている。特に、小説家の動向およびその作品を中長期的な市場の動きを把握する「マーケット・バロメーター」に見立てる概念は、短期的な市場の動きを把握するための「マーケット・レーダー」という概念を補うものとして、本稿では提示されている。

マーケット・バロメーターとしての小説家を見る場合には、その小説の全編を通じて問題にされている主題の内容と、その主題への接近方法、即ち、執筆技法を通

じて分析する必要がある。

村上春樹の場合、その主題の多くは、人間関係への関わり合いへ繋がっていくが、この事は、近年台頭している人間関係を主軸として生成する商取引に顕著に現れて⁽⁵⁰⁾いる。これらの商取引に関わる世代に共通しているのは、旧態然とした対面販売やセルフサービスでは捉えられない、微妙な心理的距離を取る能力に長けているという点である。このような世代の出現は、境界型神経症患者の研究からも予測しうる⁽⁵¹⁾ことであり、境界型神経症患者も精神分析を要する患者の範囲であると捉えるならば、小説家も彼らと同様に、ロロ・メイの指摘するような、社会の来るべき動向を指し示すバロメーターであると考えられる。

主題への接近方法においては、村上春樹の言う「井戸堀り」という作業ないし過程が、消費者欲求への接近方法に関する未知の側面と局面を明らかにしている。消費者欲求の充足は、情報を駆使した商品開発や商品計画では明らかにしえない商品の存在を示しており、そのような商品に対しては、時間を掛けて自己の欲求に適合する商品を探し当てようとする若者の消費行動にも現れている。⁽⁵²⁾同時に、このような傾向は、購買行動においても、単なる商品の売買では充足しえず、売買を軸に生起する人間関係をも含む商品提供によって初めて充足する消費者欲求の側面と局面の存在を示している。

これらの流れに共通して見られるのは、個人が抱える欲求へのより綿密な対応であるが、そこでは、売手と買手が商品とその売買に対して持つ心象を、時間を掛けながら相互に取り込んでいきながら、現実の中にその発現形態を探ることにより、商品経済における自己の位置、即ち、自己同一性を確認し続け、その結果として心理的に安定した状態を得ようとする流れである。時代の鍵概念としての「癒し」が有効なのは、このような小説的売買の絶対量が欠落していることに起因しているものと考えられ、それが現在の商品経済を反小説経済と呼ぶ所以となる。

反小説経済が現在もたらしつつある弊害は、従来の社会経済活動の方向性が力を失いつつある中に顕著に現れる。即ち、不安に耐えながらも新たな方向性を時間を掛けて模索しようとするのではなく、むしろ、従来の商品消費を加速させることで、その不安を紛らわせようとする人々の傾向である。その最たる例は、エリザベス・ワーツェルが指摘するような、プロザックの服用に見て取れる。⁽⁵³⁾社会全体の方向性の消失に伴って生じる自己同一性の喪失は、新たな自己同一性を創出する必要性和機会をもたらししているにも関わらず、人々はそのに生じる鬱状態を、新たな秩序発見までの「保留」状態にて生じるものとして甘受せず、商品消費から果てはプロザックに代表される抗鬱剤で紛らわせようとする。このような対応は「時代の閉塞感」

を加速させるばかりであり、これを打破するには「井戸堀り」による自己同一性の再発見という小説的手法が要求される。その集積が小説経済となり、次世代の経済社会の方向性を見出すこととなる。

(注)

- (1) 河合隼雄・村上春樹、『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』、岩波書店、1996年、pp.108-109
- (2) 河合隼雄・村上春樹、前掲書、p.188
- (3) 河合隼雄・村上春樹、前掲書、p.109
- (4) 河合隼雄・村上春樹、前掲書、p.110
- (5) 河合隼雄・村上春樹、前掲書、p.111
- (6) 他方の極は、社会的には肯定的には認知されない病理学的な存在であり、あるいは、明確な言語による表現形式を採るという点では、学術的活動である。
- (7) この考えを裏付ける一例として、村上春樹は「つまり自分が社会とは別の生き方をすること、親とは別の生き方をすること、そういうものをほくの小説の中から読み取って、そこにある程度思い入れをするというところがあるみたいですね」と話し（河合隼雄・村上春樹、前掲書、p. 52）、河合隼雄は「そういうことを考えているときに、村上さんのデタッチする面を読みとって、心動かされる人が多いんじゃないですか」と答えている（河合隼雄・村上春樹、前掲書、p. 55）部分を挙げることができる。
- (8) 「その社会の心的表情の下にひそむ葛藤や緊張をきわめてあざやかに示す、重要なバロメーターの役を果たしている。このバロメーターは、慎重に考慮されねばならない。というのは、まだ起こってはいないが、やがて社会にひろく展開するやもしれぬ分裂や問題の所在をもっとも的確に示してくれるからである。（Rollo MAY, *Man's Search for Himself*, W. W. NORTON & COMPANY, INC., 1953, 小野泰博訳『失われし自我をもとめて』、誠信書房、1970年、p. 8-9）」
- (9) 河合隼雄・村上春樹、前掲書、p. 66
- (10) 河合隼雄・村上春樹、前掲書、p. 66 脚注
- (11) 村上春樹が、「というのは、ほく自身、小説が自分自身より先に行っている感じがするからなんですよ。いまほく自身がそのイメージを追いかけている、という感じがある。」（河合隼雄・村上春樹、同掲書、p. 77）と発言しているのに対して、河合隼雄が「それをこれから現実化しなければいけませんね。」（河合隼雄・村上春樹、同掲書、p. 77）と発言しているのは、このような考え方を裏付けるものである。
- (12) p. 71 および p. 77
- (13) 河合隼雄・村上春樹、前掲書、p. 66 および pp. 66-69 脚注
- (14) 河合隼雄・村上春樹、前掲書、p. 127
- (15) 河合隼雄・村上春樹、前掲書、p. 119-120
- (16) 河合隼雄・村上春樹、前掲書、p. 130 脚注
- (17) 河合隼雄・村上春樹、前掲書、p. 132 脚注
- (18) 田村正紀「マーケット・レーダー」『国民経済雑誌』第156巻第5号、1987年、pp. 77-94。
- (19) 「自分に対する期待をたえずキャッチしてくれるレーダーを頭にとりつけ、そのレーダ

一の指令するままに動く (Rollo MAY, *ibid.*, p. 9)」

- (20) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, pp. 133–134 脚注
- (21) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 68
- (22) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 67 脚注
- (23) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 68
- (24) Michael POLANYI, *The Tacit Demension*, Routledge & Kegan Paul Ltd., London, 1966 (佐藤敬三訳『暗黙知の次元』紀伊國屋書店, 1980年)にあるように, 人間の意識には言語化できない部分があるとする主張もあるが, このような言説の存在自体が, あらゆる意識は言語化できるとの前提に立つ社会が存在する証左である。
- (25) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, pp. 20–23
- (26) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 30
- (27) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 30
- (28) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 35
- (29) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 35
- (30) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 75
- (31) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 75
- (32) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, pp. 78–79 および pp. 78–79 脚注
- (33) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 67
- (34) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 68 および p. 69
- (35) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, pp. 37–38 および p. 70
- (36) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 87
- (37) 自己と自我については, 河合隼雄著『コンプレックス』岩波新書, 1971年, p. 67 の理解に依拠している。
- (38) 図表3では, 自己aのままで, 自我が α から α' に変化する可能性を指摘できるが, 実際には, 自己の新しい側面や局面の発見に伴って初めて, 自我の見直しを迫られると考えられるため, 実質的には, 自己の変化に焦点を当てた議論が適切であり, より正確な議論のためには, 自己と自我に関する心理学的研究および脳研究の成果を待たなければならない。
- (39) 村上春樹が, 「壁抜け (河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 101 l. 8)」あるいは「『井戸』を掘って掘って掘っていくと, そこでまったくつながるはずのない壁を越えてつながる (河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 70 l. 15–p. 71 l. 1)」と表現している内容が, これに当たる。
- (40) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 81
- (41) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 84 脚注
- (42) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 84 脚注
- (43) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 80 脚注
- (44) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, pp. 88–91
- (45) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 84
- (46) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 88
- (47) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 61
- (48) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 64
- (49) 村上春樹が「『井戸』を掘って掘って掘っていくと, そこでまったくつながるはずのない壁を越えてつながる」と説明しているのは (河合隼雄・村上春樹, 前掲書, pp. 70–71),

既存の論理では矛盾する事柄が³、新しい論理の中では矛盾しない事柄となることを示している。

- (50) 例えば、日本経済新聞 1999年8月7日付け記事「商売で行こう」参照
- (51) 池田信寛「商取引における「やさしい」関係の特質」, 広島経済大学研究双書, 第18冊, 2000年6月を参照のこと。
- (52) 例えば、日本経済新聞 1999年7月3日付け記事「急降下する瞬間消費 情報化に反逆する若者の怪現象」参照
- (53) Elizabeth WURTZEL, *Prozac Nation*, Houghton Mifflin, 1994 (滝沢千陽訳『私は「うつ依存症」の女』, 講談社, 2001年, pp. 264-280)